

「バングラデシュでのテロ」

2016年07月07日

バングラデシュの首都ダッカの飲食店を、テロ集団が襲撃し、20名の方々が犠牲になる悲惨な事件が起きた。そのうちの7名は日本人で、国際協力機構（JICA）のプロジェクトで、バングラデシュの発展に貢献したいという篤い思いで働いていた方々であった。彼らの思いが理解されず、途中で断ち切れ、どんなに無念であろうか。ご遺族は「なぜ」と、耐え難い悲しみにあるだろう。バングラデシュは世界で最貧国の一つである。

私は1994年にバングラデシュに行った。それ以前に、アジア学院に留学していたバングラデシュの女性たちを教会に迎えて、話を聞いた。アジア教育基金（ACEF）では、バングラデシュに寺子屋を建て、子どもたちを教育する活動をしている。その事務局長をしていた船戸良隆牧師を招き、説教を聞いた。それらから、バングラデシュに行ってみようという思いに駆られ、ACEFのスタディツアーに参加した。行って見て、その貧しさに頭が真っ白になった。私は1947年に、旧満州から家族7人で引き揚げ、貧しさを体験している。しかし、バングラデシュの貧しさは桁が違っていた。

神学生時代、鈴木正久牧師が伝道、牧会する西方町教会に通っていた。鈴木先生が1年間、ドイツに行かれ、帰国後、色々な経験を話してくださった。その中で、帰国途中、飛行機の給油のため、ニューデリーに寄り、時間潰しにニューデリーの町を歩いた。そこで見たことはドイツでの経験を吹っ飛ばすようなことだったと言われた。どんなことだったのだろうかと思っていたが、バングラデシュの貧しさを見て、このことではないかと思った。ニューデリーとダッカは違うだろうが、鈴木先生が見たものと私が見たものは、おそらく同じものであっただろう。

物乞いが多く、応じないように言われていたので、無視したが、彼らの生活が見える。車が信号停止すると、公園で摘んできた花を束ね、子どもを抱いた、痩せた母親が売りに来る。駅に停車していると、子どもたちが水を買ってくれと、ペットボトルを差し出す。線路脇で、家族が小さな一つの鍋をつつきながら、肩を寄せ合って食事をしている。辺見庸氏は『もの食う人びと』を著わし、バングラデシュで半分すえたような食事をしたと書いているが、想像できる。私の行った頃は「リキシャ（輪タク）」が多く、乗ってくれとせがまれた。映像で見る現在は、自動車はかなり普及しているようだが、町の喧騒は変わりない。私たちは2週間くらいの滞在であったが、強烈なインパクトを受けた。JICAで、バングラデシュでの教育に携わったある若者は人生観が変わったと喜んでいて。

今回、犠牲になった方々は、このバングラデシュの現実に触れ、何とか発展に尽くしたいと思ったのである。電車や地下鉄が走れば、交通渋滞はどれほど解消されるだろうか。物の流通は確実に経済的な発展を促す。JICAの職員は高給ではない。辞めた後の処遇が十分になされていないという批判もある。彼らの痛ましい最期は残念でならない。

IS（イスラム国）は多国籍軍の空爆によって、勢力地域は縮小していると聞く。しかし、テロはヨーロッパ、トルコ、バングラデシュなど、世界中に広がっている。テロに走る人々は西欧的な価値観に対し、反発しているようであるが、無差別な殺人で、世界を震撼させることだけが目的のように見える。ただ、貧富の格差がテロの温床になっていることは確かであろう。彼らのニヒリズムを癒す手立てはないのか。私が知り合ったバングラデシュとフィリピンのイスラム教徒たちは温和で、他の人々と協調的で、好感が持てた。彼らが主導して、イスラム社会を築いて欲しい。